

西表島におけるカキイ（魚垣）について

A note of "KaKii" or stone fence for catching a fish in iriomote Island

仲 底 善 章

(沖縄県立博物館)

YOSHIAKI NAKASOKO

(Okinawa Prefectural Museum)

1 はじめに

魚垣との初めての遭遇は、高校1年の入学早々、中学校の頃の同期生と連れだって、石垣島一周のサイクリングの途中であった。石垣島の東海岸、宮良湾沿いに自転車を走らせている時のことである。突然、私の視野に潮の引いた珊瑚礁の干潟に、点々と円弧を描く石垣の線であったり、干潟を横切るがごとく点在したり、沖に向かって点在する石垣の線であった。

その後、教師として西表島の船浮での勤務、石垣島の明石での勤務を経る中で、その石垣の囲いが魚を獲るためのものであることを知るようになった。

今回の西表総合調査の機会に、西表島に点在しているカキイ（魚垣）の現在の様子とその分布について調査をした。以下、西表島のカキイ＝魚垣について、目測や歩測や島人から得た情報をもとに報告する。

2 カキイ＝魚垣について

調査からカキイについて、(1) 遠浅の干潟に多く見られる。(2) 河口に広がる遠浅の干潟によく見られる。(3) カキイは珊瑚礁の広がる干潟付近にはあまり見られない。(4) 所々に魚が逃げ込むためのクムリ（潮溜まり）を作っている。(5) 稲作が行われていた地域の海岸によく見られる。のことがわかった。

稲作は古謡に歌われているように、人頭税の物納物として栽培されていた。耕地の乏しい鳩間島や黒島、竹富島・新城島の人々は、西表島に水田を開墾しての通り耕作をしていた。

このような稲作づくりは昭和50年代まで行われていたとのこと。カキイは稲作づくりの期間、作業の合間に潮時を見て、食料の魚を捕獲する施設として、水田の近くの遠浅の干潟に作られたようである。

鳩間節の中に「マイヌ トゥーユ ミワタシバ イクフニ クルフニ ウムシルヤ (前の渡を見わたすと 行く舟 来る舟の様が見事だ)」「マイヌ シミシキ ウムシルヤ ア
ワヌ シミタテイ サテイミグトゥ (稲を積み重ねて素晴らしいことよ 粟は積み立て
てさても見事だ)」や、「インダ フクパマ シザバナリ フノーラ カラヌ マシスジー
ヨ (伊武田 福浜 下離りは、船浦よりも立派な土地である。)」の一節がある。

また、新城島の民謡、離レマヌ前ヌ渡節にも、「ハナレマヌ マイヌトウ ハテルマヌ
マイヌトウ (新城島の前の荒海よ 波照間島の北の荒海よ)、マイヌドウヌ ネヌラバ
シカマドヌ ネヌラバ (前の荒海がなかったら 仕事 (大原へ) をする為の渡りがなかつ
たら) イトハユティ チイカイス ヌヌハユティ オハラス (糸を張った海上でお供いた
します 布を張った海上で走らします)」一節がある。これらの古謡はいずれも、通い耕
作の様子を歌ったものである。

鳩間島は珊瑚礁の島である為、水田を作ることは困難であった。その為、人頭税納入の
手段として、対岸の西表島の伊武田、福浜、下離での稲作を強制させた。その為、鳩間島
の人たちは、稲作づくりの期間には西表島に渡り、田圃近くにタズクヤ (田宿屋) を建て、
2～3泊して耕作をしていた。

新城島も珊瑚礁の島のため、田圃をつくることが出来なかった。そのため、対岸の西表
島の大原地区にある田圃を耕作するために、海を渡って行き、納税の為の米作や役人の俸
禄田を開いて耕作していた。そのことをシカマドウ (シカマ渡) とよんでいた。

同じく竹富島伝わるマザカイ節には「イキヤヌ スミヤンドウ ナグヌ ユヤンドウ
ナカマ クイダ (如何なるわけで どんな理由で 仲間村に移ったのか) ウハラダ ミ
ナグチヌ ユヤンドウ (土地の肥えている大原田やミナグチ田があるから) ウフマシイヌ
ナガマシイヌ ユヤンド (大きい舁田 長い舁田があるから)」と歌われ、竹富島から
西表島の仲間村に移り住んだことを詠んだ一節がある。この歌に歌われている仲間村のウ
イカ田 (役人の俸禄田) は明治30年頃まで、竹富島の仲筋の金城山多が耕作していたと
ういう伝えがある。

西表島のカキイの所有については、鳩間島の島民が所有するカキイは、西表島のニシ崎か
らユツン川にかけて、竹富島の島民が所有するカキイは、西表島の野原崎から高那に点在す
る。また、由布島から古見付近は黒島、大原付近は新城島の人たちのカキイが点在する。

何故か西表島の西部地区、特に浦内川から崎山湾にかけての西南の地域では広い干潟が
広がっているにもかかわらずカキイをほとんど見ることはできない。この要因については
まだ不明である。租納を中心としたこの地域には浦内川や仲良川流域の遠くの水田に泊ま
りがけでの稲作づくりの形態があった。人々はそうした田に田小屋 (シコヤ) を建て、炊
事や寝泊まりができるようにしていた。

3 西表島におけるカキの分布図



西表島におけるカキの分布図

4 各カキの位地とその形状

(1) 仲間川河口付近

- 図番号 ① ・カキの名称：イシャブザのカキ
・所有者：大浜（通称イシャブザ）
・構 図：直接歩測できなかったため、正確な距離は出せない。大浜博起さんの話によれば、約200m程の長さとのこと。近くには戦後まで新城島：上地島の方が通い耕作の為に寝泊まりをおこなった15～16戸の小屋からなる集落ソディ村があったとのこと。

- 図番号 ② ・カキの名称：不明
・所有者：不明
・構 図：聞き取りの結果、図②のようであるとのこと。



図番号①



(2) 赤伊田川河口付近

図番号 ③ ・カキイの名称：トイラカキイ

・所有者：山里さん？

・構 図：図点アはほぼ直線に伸び、歩測で250歩（175m）の長さ。図点イの口の広さは歩測40歩（30m）、図点ウは歩測175歩（87m）の石積み。



図番号③



(3) 前良川河口付近

図番号 ④ ・カキイの名称：不明

・所有者：トーヤ（與那覇）さん → 垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

・カキイの構図：前良川河口の小島から、図アのように歩測250歩（175m）に伸びる。図イの口は歩測36歩（25m）開いている。図ウは歩測450歩（300m）でほぼ直線状に伸びている。

図番号 ⑤ ・カキイの名称：不明

・所有者：トーヤ（與那覇）さん→垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

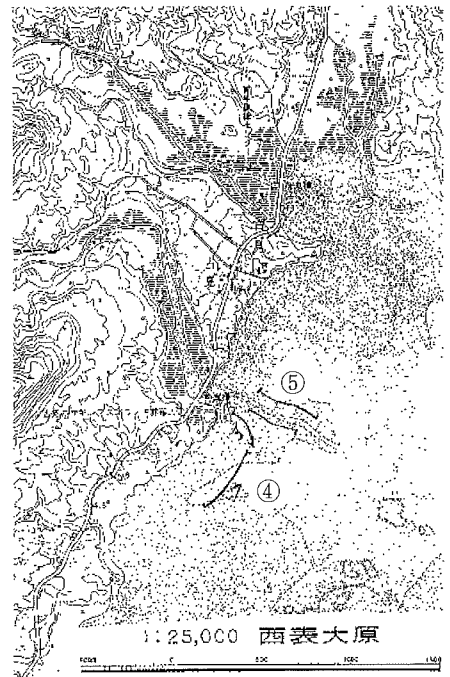
・構図：前良川河口の水路に沿って、図のように伸びる。カキイの跡なのか？、川の流れて石が垣になったのかは不明である。



図番号④



図番号⑤



(4) 後良川河口 ～ カサ崎 ～ ヌスク盛

図番号 ⑥ ・カキイの名称：不明

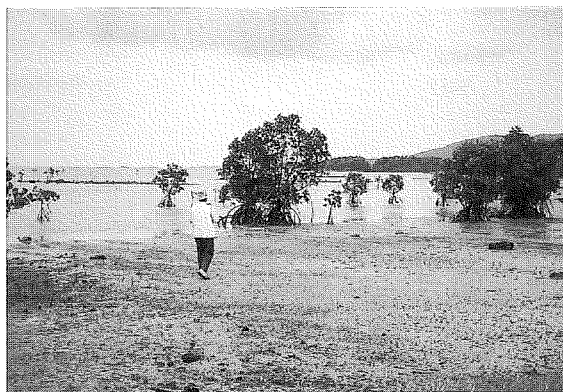
・所有者：トーヤ（與那覇）さん→垣花さんへ（元営林署職員那覇在住）？

・構 図：後良川河口を、図のように伸びる。カキイの跡なのか。道路の石積みか不明である。

図番号 ⑦ ・カキイの名称：ヌスクカキイ

・所有者：竹富島の宮良さん → 田房さんへ

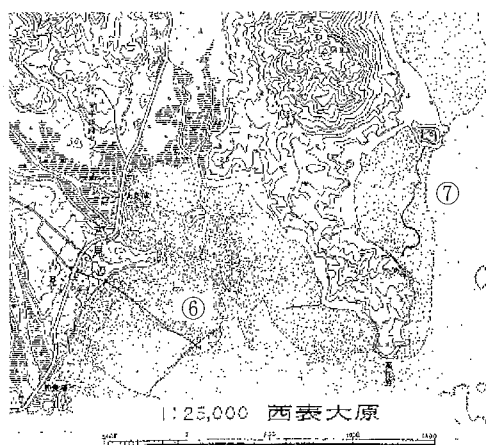
・構 図：ヌスク盛からカサ（嘉佐）崎に図のように伸びる。現在、西表島で実際に使われている唯一の魚垣である。歩測で1170歩（820m）所有者は古見在住の田房敬助である。田房さんからの聞き取り調査はできなかった。



図番号⑥



図番号⑦



(5) 野原崎南付近

図番号 ⑧ ・カキイの名称：不明

・所 有 者：仲本さん ？

・構 図：図のように歩測で785歩（550m）で伸びる。垣の口は目測で200mほど開いている。

図番号 ⑨ ・カキイの名称：不明

・所 有 者：不明

・構 図：非常に小さい垣で、西表島では1番小さい垣ではないだろうか。図のように歩測で250歩（175m）で伸びる。



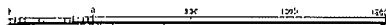
図番号⑧



図番号⑨



1:25,000 西表大原



(6) 野原崎西

図番号 ⑩、⑪ ・カキイの名称：不明

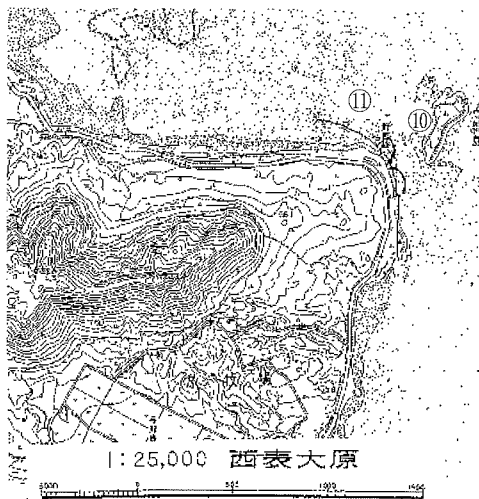
・所有者：不明

・構 図：図⑩のカキイは歩測で360歩（250m）である。図⑪のカキイとセットになっている。カキイの口は野原崎で広がっている。

図⑪のカキイは歩測で600歩（420m）で、カキイの口の広さは小島まで、ほぼ150mでした。



図番号⑩



図番号⑪

(7) ホネラ川河口付近

図番号 ⑫ ・カキイの名称：不明

・所有者：不明

・構 図：図⑫の図点アのように海岸から、歩測400歩（280m）で沖に伸びる。図点イの口の広さは歩測48歩（28m）である。図点イから図点ウ、エの口を経ての長さは、歩測1202歩（840m）でした。

図点ウ、エの口の広さは歩測80歩（56m）、100歩（70m）でした。

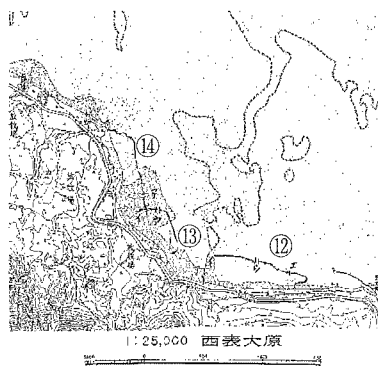
図番号 ⑬、⑭ ・カキイの名称：不明

・所有者：不明

・構 図：図⑭のカキイは全長、歩測1056歩（740m）で図点アの口の広さは歩測40歩（28m）である。石積みは図点イの場所で交差をしている。図⑬のカキイの全長、歩測729歩（510m）で、図点ウの口の広さは、歩測40歩（28m）でした。



図番号⑫



図番号⑬



図番号⑭

(8) ユツン川河口付近

図番号⑮、⑯ ・カキイの名称：不明

・所有者：不明

・構 図：図⑯のカキイの全長は図⑮のカキイとの接点で歩測835歩(490m)でした。図⑮のカキイの全長は、図点イを通過して図⑯のカキイとの接点で歩測169歩(120m)、その後の図点エまで歩測390歩(273m)でした。図点アの口の広さは歩測15歩(10m)、図点イの口の広さは歩測7歩(5m)、図点ウの口の広さは歩測40歩(28m)、図点エの口の広さは歩測100歩(70m)でした。

図番号⑰、⑱ ・カキイの名称：不明

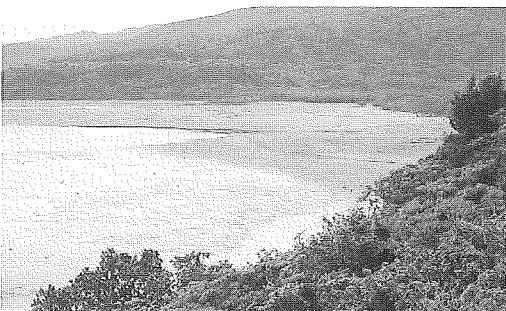
・所有者：不明

・構 図：図⑰のカキイの全長は図⑱のカキイとの接点イから、歩測で278歩(1340m)で、図点アの口の広さは歩測100歩(70m)した。

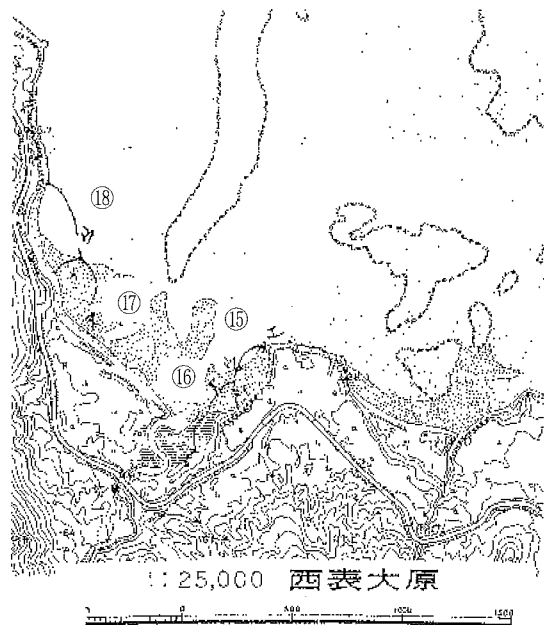
図⑱のカキイの全長は、図点ウを通過して図⑰のカキイとの接点で歩測900歩(630m)でした。図点ウの口の広さは歩測30歩(21m)でした。



図番号⑮、⑯



図番号⑰、⑱



(9) 大見謝川河口付近

図番号⑱ ・カキイの名称：サキインダーのカキイ？

・所有者：不明

・構 図：図⑱のカキイの全長は、図点アまで歩測で805歩（563m）で、図点アの口の広さは歩測5歩（4m）でした。図点イの口の広さは歩測60歩（42m）でした。図点ウの口の広さは歩測30歩（21m）でした。

図番号㉑ ・カキイの名称：ゲーダのカキイ？

・所有者：不明

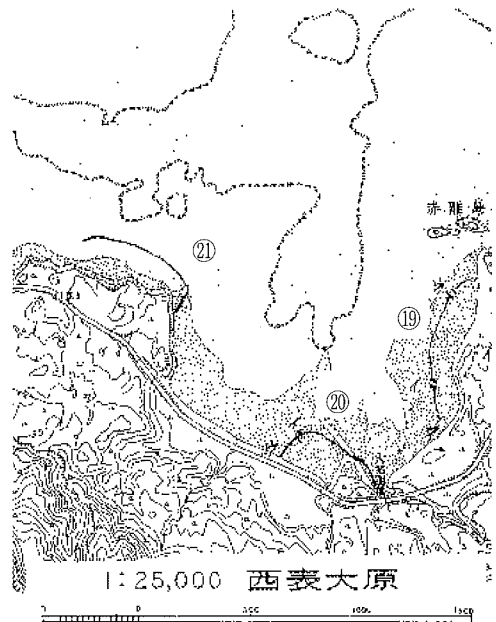
・構 図：図㉑のカキイの全長は、大見謝川の水路より図点イまで、歩測で1000歩（700m）で、図点イから図点ウの岸までは歩測220歩（155m）でした。



図番号⑱



図番号㉑



(10) クーラ川河口付近 ～ インダ（伊武田）崎

図番号⑳ ・カキイの名称：トマダのカキイ

・所 有 者：不明

・構 図：歩測のデータはなし、目測で図㉑のとおりである。

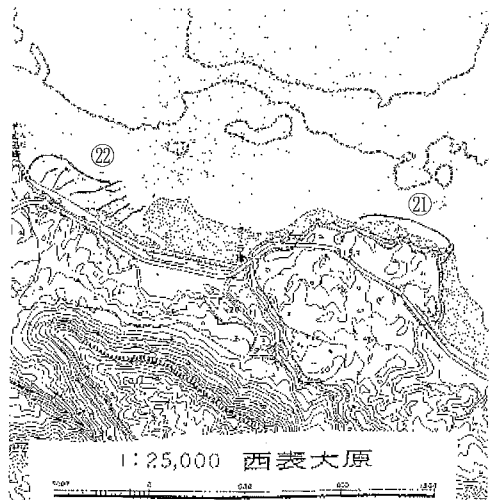
図番号㉒ ・カキイの名称：不明（鳩間島大城さんが詳しいとのこと）

・所 有 者：不明 々

・構 図：歩測できず、目測で図㉒のとおりである。



図番号㉑



図番号㉒

(11) インダ（伊武田）崎 ～ 船浦湾付近

図番号⑳ ・カキイの名称：トマダのカキイ

・所 有 者：不明

・構 図：インダザキ（伊武田崎）から鳩離島向け、目測で20m沖に伸び、その後、45°で左に50m伸び、岸にそって150m伸びる。歩測できず。

図番号㉑ ・カキイの名称：ナカシのカキイ

・所 有 者：鳩間島の吉川家、松竹家、寄合家の共有

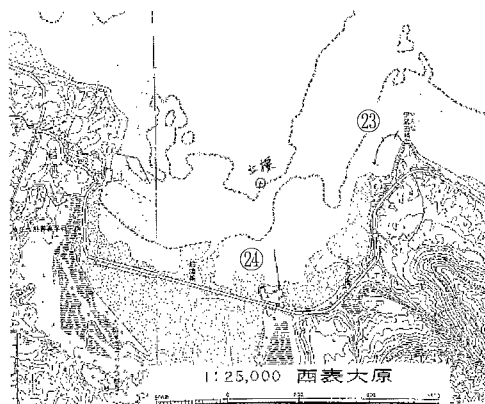
・構 図：海岸から鳩離島向け、立標線上に伸びる。途中で石垣が切れているので距離は不明である。



図番号⑳



図番号㉑

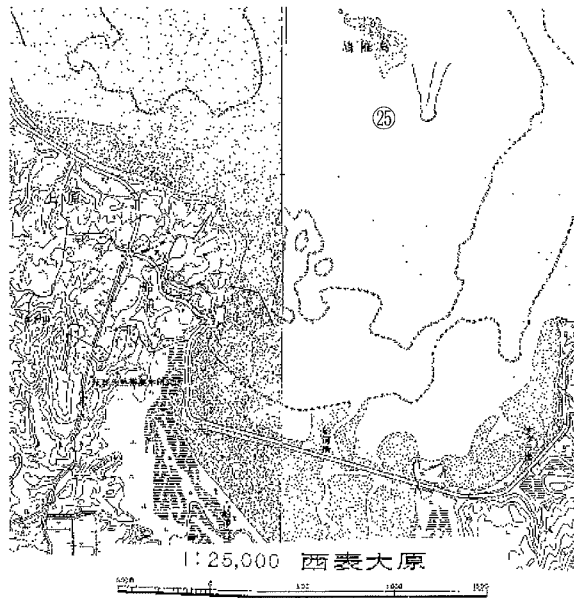


(12) 鳩離島付近

図番号㉔ ・カキイの名称：ハトバナリのナカセのカキイ

・所有者：鳩問島の慶田城家、上原家の共同所有とのこと。

・構 図：歩測しての調査をすることができなかつたので、位置や大きさは不明である。聞き取り調査による場所と大きさを図示する。



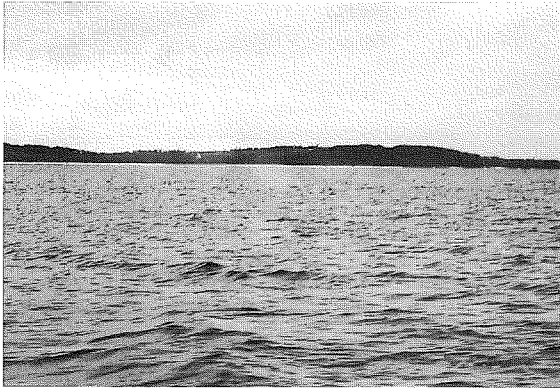
図番号㉔

(13) ニシ崎付近

図番号②⑥ ・カキイの名称：ニシミジダーヌ（西水田の）カキイ

・所 有 者：鳩間島西原家

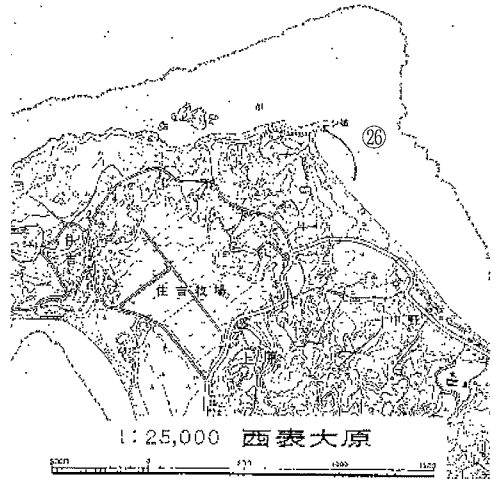
・構 図：ニシ崎から海岸に沿って、ほぼ直線状に仲野集落向けに伸びる。歩測できなかったので距離ははっきりしないが500mぐらい。



図番号②⑥



図番号②⑥



5 おわりに

カキイの調査については、宮古島研究、第4号佐渡山正吉氏「イノーの民俗」は、宮古におけるイノー内におけるカキイの分布について、宮古島の狩俣、西平安名崎の東海岸と伊良部島と下地島間に広がるカタパルイナの2ヶ所に集中的に存在するとのことをあきらかにしている。

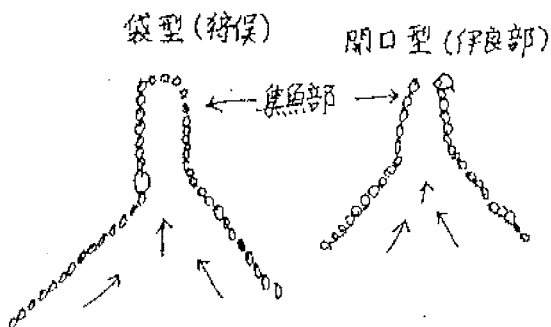
カキイの構造は、海岸から干瀬に向かって狭くなり、先端は袋になっている袋型のものと（狩俣地域）先端がだんだん狭なり、先が開いている開口型（伊良部地域）とがある。それに対して、八重山地域のカキイのほとんどが湾になっている河口近くに多く、海岸から沖の方に仕切るように蛇行して延びている。

多い込まれた魚の採取は、宮古では、潮が引くのを見計らってカキイの先端に魚を追い込み、門口で目の細かいサディ網で小鱼をすくい取る方法をとる。それに対して八重山では、カキイの蛇行した所にクムリ（潮溜まり）を作ったり、カキイの付け根にクムリ（潮溜まり）を作って魚を閉じ込め、鉈や網を使って魚を採集する方法をとっている。

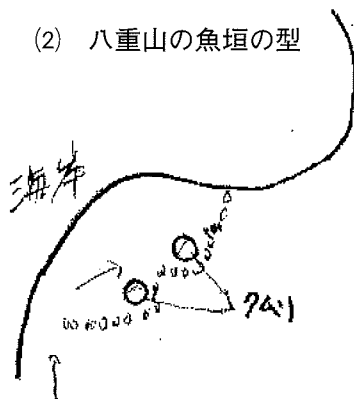
今回、西表総合調査の一環として、カキイの調査の機会を得ましたが期間が短く、調査としては不十分であったため、調査の対象がカキイの所在場所と規模についての調査に限定された。カキイの所有者の特定とその活用法等について今後の課題としたい。

今回の調査にあたっては、鳩間島在住の通事力氏、鳩間島出身で上原在住の富里保夫氏、古見在住の富里元西表営林署職員舟浮義雄氏、新城島出身の大浜博起氏の世話になった。紙面を借りて感謝申し上げます。

(1) 宮古の魚垣の構造、2種の型がある



(2) 八重山の魚垣の型



参考文献

竹富町立鳩間小学校百周年記念誌：同編集委員会

日本のいちばん南にあるぜいたく：楠山忠之著 情報センター出版局

八重山民謡誌：喜舎場永洵著 沖縄タイムス社

宮古島研究第4号 イノーの民俗：佐渡山正吉